

美術手帖

1

2003
Vol.55
No.829

BT

磯崎新×ヤノベケンジ
ゲルハルト・リヒター

VERY NEW YORK!

特集

ニューヨーク・ニューアート最前線

<http://www.bijutsu.co.jp>

美術を学ぶ **保存版**
2003データ&ガイド



「もうじき中目黒で個展をするんだ」。
NYも東京も、ストリート文化に時差はない。
Ryan McGinness ▶ p.55

37

写真=宇山久美子

Ryan McGinness ライアン・マクギネス

ギャラリーでの展示によってではなく、Tシャツやスケートボードなどのプロダクト、または独自の本の出版などによって、アート界から注目されているアーティストたちが増えている。彼らの多くは、本来グラフィック・デザイナーであったりグラフィティ・アーティストだったりするのだが、こういった一連のグループに共通することは、彼らがアート界と一線を置いたような創作スタイルや考え方をもちつつ、ストリート・カルチャーや音楽に密接した要素を打ち出しているところで、このライアン・マクギネスもその範疇に入るアーティストといえるのだろう。

大学でアートとデザインを学んだマクギネスは、卒業後プロのデザイナーとして働きながら、同時に多くのアート作品も制作しつづけてきたわけだが、彼のユニークだった点は、デザイン的なアプローチや技術を自らのアート作品にも適用したところだった。たとえば、シンボルやサインなどを多用したスケッチをコンピューターであらかじめつくり、そ

から絵画やシルクスクリーンや壁画として制作、本来デザイン的だったものをファイン・アートにおけるコミュニケーション・ツールとして取り込んだのだった。この手法は、1980年代にマット・マリカンがやっていたことを思いださせたりもするが、このアーティストのはもっとパーソナルかつデザインよりのアプローチで、そんなところが案外いまの時代の流れにマッチしていたのかもしれない。「サインやアイコンなどを組み合わせた作品は、個々のシンボルに関しては注意深くつくりあげながらも、それを連結させたりオーバーラップさせるプロセスはだいたい即興的に行っている、あまり計算したり操作しないでやることに興味があるんだ。面白いのは、まったく同じシンボルを使っているでもそれぞれ観る人によって解釈が異なることで、実はそれが自分の望むところなんだ」。

マクギネスは、自分がデザイナー出身のアーティストだということを隠そうとしない。それどころか、デザイナーとしてのバックグラウンドをフルに活用しながら、デザインの仕事から学んだという「観るものとの視覚的なコミュニケーション」を作品に反映しているように感じる。少し前まではデザイナーがアート作品をつくりギャラリーなどで展示してもあまり評価されなかったが、最近はこのような考え方やアプローチの仕方への理解が得られてきたのか、この夏にNYのダイチ・プロジェクトで行ったショーは、アート界ではそれほど知名度もなかったにもかかわらず、かなり大きな話題になったほどだ。この展示では、トレードマーク

から絵画やシルクスクリーンや壁画として制作、本来デザイン的だったものをファイン・アートにおけるコミュニケーション・ツールとして取り込んだのだった。この手法は、1980年代にマット・マリカンがやっていたことを思いださせたりもするが、このアーティストのはもっとパーソナルかつデザインよりのアプローチで、そんなところが案外いまの時代の流れにマッチしていたのかもしれない。「サインやアイコンなどを組み合わせた作品は、個々のシンボルに関しては注意深くつくりあげながらも、それを連結させたりオーバーラップさせるプロセスはだいたい即興的に行っている、あまり計算したり操作しないでやることに興味があるんだ。面白いのは、まったく同じシンボルを使っているでもそれぞれ観る人によって解釈が異なることで、実はそれが自分の望むところなんだ」。

マクギネスは、自分がデザイナー出身のアーティストだということを隠そうとしない。それどころか、デザイナーとしてのバックグラウンドをフルに活用しながら、デザインの仕事から学んだという「観るものとの視覚的なコミュニケーション」を作品に反映しているように感じる。少し前まではデザイナーがアート作品をつくりギャラリーなどで展示してもあまり評価されなかったが、最近はこのような考え方やアプローチの仕方への理解が得られてきたのか、この夏にNYのダイチ・プロジェクトで行ったショーは、アート界ではそれほど知名度もなかったにもかかわらず、かなり大きな話題になったほどだ。この展示では、トレードマーク



THIS LIFE IS SO LIFE-LIKE 2002
シルクスクリーン

ともいえるシンボルや記号や装飾的なエレメントを使った大規模な壁画を発表、だれもが認識できるようなシンプルな記号などを組み合わせながら、観るものの記憶やアクションに訴え想像力を駆り立てるようなものに仕上がっていたが、そこにはあきらかにデザインから離れたなにか新しい表現スタイルが提示されていたはずだ。

*マクギネスのアトリエ(37ページ)はソーホーとチャイナタウンの中間辺りに位置し、すぐ階下には友人でもあるアーティストのトム・サックスが住んでいる。広大なスペースは、デザインするエリアとアート制作をするエリアとにくっきり分割されていて、まもなく始まるチルシーのPrinted Matterと東京での個展用の新作がところ狭しと並べられていたが、床面には絵具などが飛び散った痕はまったく見当たらず、彼の几帳面な性格があらわれている。

◎文=河内タカ
[インディペンデント・キュレーター]

無題 2001 ミクストメディア、ライト・ボックス 121.9x91.4cm



ライアン・マクギネス

1972年、ヴァージニア州ヴァージニアビーチ生まれ。カーネギーメロン大学でデザインとアートを学んだ後、94年にニューヨークに移り、デザインと現代アートの両方で活動を開始。99年、自身のデザイン・コンセプトや理論をまとめた作品集「Flatnessisgod」の出版後、3冊の作品集を立て続けに刊行。バルコニャラリーや吹米のギャラリーでも個展を行う。今秋、GASから作品集が出版され、中目黒のGAS SHOPで個展を開催する。詳細は242ページ参照のこと。

exhibition

今月号の顔! ライアン・マクギネスの個展

オープンはやほやのGAS SHOP。記念すべき第一弾の個展は、今月号の表紙を飾ったライアン・マクギネス。フラットなアイコンやシンボルを用いた、グラフィカルなスタイルで知られる彼は、パリのコレットやNYのジェフリー・ダイチ・プロジェクトなどで精力的に作品を発表している、まさに旬のアーティスト。そんな彼がGASでの個展につけたタイトルは、「THIS DREAM IS SO LIFE-LIKE(この夢はとても生なましく現実的なもの)」。ちょっと観念的なタイトルが



THIS DREAM IS SO LIFE-LIKE 2002

つけられたこの展覧会では、新作のアイコンやサインを使った壁画を中心に、絵画や映像作品を発表します。グッズも併せてください。GASだもの。ブックにDVDにTシャツなどなど、各種取り揃えてお待ちしております。ホワイトキューブに立ち現れる、マクギネスのドリーム・ワールドをご堪能ください。

❖ THIS DREAM IS SO LIFE-LIKE
A New Exhibition by Ryan McGinness
12月18日〜1月26日、東京・中目黒のGAS SHOPにて。入場無料。問合せは本店(電話03-5721-0233)まで



KANGAROO AND CHIPMUNK 2001



右—無題(部分) 2002 紙にシルクスクリーン 64.7x49.5cm 左上—無題 2001 鉄にうわ葉を焼きつけた磁器 53.3x45.7cm 左下—ダブル・サッドネス 1999 キャンバスに着色 183x183cm